

大震災から15年：風化させない取り組み

東日本大震災から今日（3月11日）で15年が経ちました。14時46分、突然の大きな揺れ。東北地方や北関東沿岸には巨大な津波が到来し、多くの、そしてかけがえのない命が奪われました。平安女学院に通う生徒のほとんどがいまや震災の後に生まれた世代。そしていつおこるかわからない自然災害についてどのように備えるか、「**心理的防災**」の意義が問われていると思います。

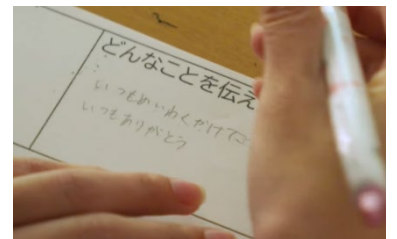
岩手日報は被災者のこうした声を集め、2017年から動画や紙面でキャンペーン広告と「**最後までわかっていたなら**」を毎年紹介してきました。「大切な人に大切なことを伝えられないまま別れてしまった」そんな後悔を抱える人がいること、「明日が来るのは当たり前ではない」ということが全国の学校で教材として選ばれています。そこで読まれている詩は、アメリカ人女性がつづったものです。皆さんもぜひ声に出して読んでみてください。

「最後までわかっていたなら」作：ノーマ・コーネット・マレック 訳：佐川睦

あなたが眠りにつくのを見るのが 最後までわかっていたら
わたしは もっとちゃんとカバーをかけて
神様にその魂を守ってくださるように 祈っただろう
あなたがドアを出て行くのを見るのが 最後までわかっていたら
わたしは あなたを抱きしめて キスをして
そしてまたもう一度呼び寄せて 抱きしめただろう

（中略）

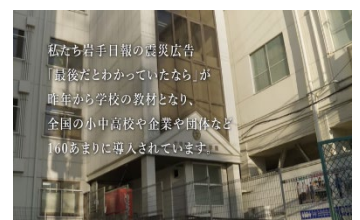
たしかにいつも明日はやってくる
でももしそれがわたしの勘違いで 今日で全てが終わるのだとしたら
わたしは 今日 どんなにあなたを愛しているか 伝えたい



岩手日報社のこの企画から「3月11日を『大切な人を想う日にしよう』と呼びかけられ、署名活動によって震災から10年（2021年）にあわせて3月11日を「県民の日」と条例で指定しました。

○中学2年生の本校生徒の感想

…私がお母さんのおなかのなかにいたときの震災だとお母さんから聞いて興味を持ちました。この記事を読んで、いつ何があっても後悔することのないように感謝を伝えていきたいと思いました。東日本大震災のような震災がいつおこってもおかしくないの、家族と防災について話し合ったり、備蓄品の賞味期限・消費期限が切れていないか、使える状態なのかを確認する。いざというときはどこに行くのか、避難所に行くのか、行かないならどうするのか、いざという時の備えを万全の状態にしておくのが大切だと思いました。





東日本大震災から15年

東日本被災地実行委員会だより「轍」の足跡～



今年3月で、東日本大震災から15年を迎えます。この15年間は、日本の防災のあり方を改めて考える時間でもありました。被災地では長い年月をかけて復旧・復興が続けられ、地域の姿も少しずつ前進してきました。その一方で、震災の記憶や教訓が、社会の中でだんだん薄れてきていることも否めません。

第221回国会では、高市早苗内閣総理大臣が「福島復興なくして東北復興なし。東北復興なくして日本の再生なし」と述べました。震災から15年という節目は、国全体で復興と防災の歩みを見つめ直す大切な年でもあると感じます。

日本では、大きな災害がいつ起きてもおかしくありません。だからこそ、これまでの災害から何を学び、どう備えていくのかは、現代を生きる私たちの重要なテーマです。南海トラフ地震や首都直下地震は依然として心配されていますし、地球温暖化の影響で豪雨や洪水、土砂災害も年々激しさを増しています。東日本大震災以降も、熊本地震や能登半島地震などが続き、2025年には津波警報が長時間続く事態もありました。2026年には政府が「防災庁」創設に向けた法案を進め、大規模災害への備えをより強化しようとしています。

また、NHKの「災害記録マップ」では、全国の災害映像を地図上で見ることができます。当時の映像や証言から、被害が広がった理由や、命を守る判断につながった行動を知ることができ、とても貴重な資料です。過去の状況を具体的に知ることは、次の災害に備えるうえで大きな助けになりますし、当時の経験者の声には、学びたいと思わせる示唆が数多く含まれています。

災害から15年が経つと、記憶が薄れていくと言われます。だからこそ今は、大人も子どももといった、どの世代に関係なく、一人ひとりが震災以降の歩みを振り返り、できるようになったことや、まだ足りないことを見つめ直す良い機会なのだと思います。先日の中2の陸前高田市役所（岩手県）の出張授業もそうですが、各地の講演会やシンポジウムや講演会に参加することで、被災地の声に触れることができ、日々の備えにつなげるヒントを得ることもできます。

この「轍」も、創刊号（2011年3月12日発刊）から、皆さんの先輩より引き継がれて、気がつけば15年を迎えました。実際に被災を経験した方も、報道を通して災害を知ってきた方も、これまでの災害から学んだことを忘れずに、地域や次の世代へそっと受け渡していくことが大切だと感じています。震災から15年という節目が、もう一度防災や減災について考え、日々の暮らしの中でできることから行動していくきっかけになれば、うれしく思います。

たよりの名前について

わだちとは「車が通ったあとに残る車輪の跡」です。津浪ですべてのものが破壊された被災地の情景を目の当たりにしながら、そこに、人々は新たに、「出会いと経験」を通して再び「人生の足跡」を作ると思いました。このたよりは、被災された人にかぎらず、この地震でこころ痛めているすべての人の取り組みを「人生の足跡」として記していこうとの願いを込めて付けました。

「轍」No.1により



NHKの「災害記録マップ」